

茨城県水戸市～栃木県小山市

桜川市教育委員会 川俣正英

石岡市の鉄道関係展示

石岡市立ふるさと歴史館では、第9回企画展として、「鉄道の時代に描いた夢―明治～昭和初期の鉄道計画と石岡の先人たち―」を開催しました（平成28年8月30日～11月27日）。本展は、「鉄道の時代のはじまり」「明治初期の石岡～県内最大級の商都～」「まぼろしの水戸線『南線』と常総鉄道」「日本鉄道土浦線（現常磐線）の開通」「明治後期の石岡～醸造家たちの隆盛～」「鹿島参宮鉄道（第1次）と霞浦鉄道のとん挫」「鹿島参宮鉄道（第2次）の開通と濱平右衛門」「水戸電気鉄道、石岡に至らず」「まぼろしの加波山鉄道」のテーマで構成され、現在も運行中の鉄道、廃線となった鉄道、実現には至らなかったまぼろしの鉄道、これらの鉄道敷設に関わった石岡の先人たちに焦点をあてた展示でした。この展示は、石岡市及び周辺各地に関わる、明治から昭和初期にわたる鉄道関係の展示でした。そして、従来取り上げられなかった鉄道史の展示は、画期的な企画でもありました。

水戸線開業130周年

前記の企画展で取り上げられたJR東日本の水戸線（小山～友部）は、茨城県最初の鉄道会社である、水戸鉄道会社によって明治22年（1889）1月16日に開業（小山～水戸）されました。平成31年1月16日に、開業130年の記念の日を迎えました。JR東日本水戸支社では、開業130周年記念事業として、「スタンプラリー」を水戸・友部・笠間・下館・結城・小山の6駅で実施しました（1月12日～2月11日）。また、1月19日には、開業記念列車が下館（始発）～水戸（終点）間で運行されました。

茨城県内を走った最初の鉄道

明治18年7月16日、日本鉄道会社第二区線（現JR宇都宮線）が大宮（埼玉県さいたま市）～宇都宮（栃木県宇都宮市）間に開通しました。この時、茨城県の西部に位置する古河市内で、茨城県内初の鉄道が走り、古河駅が最初の駅として誕生しました。

茨城県内に鉄道をという夢との出会い

明治19年5月3日午前6時、日本鉄道会社第一区線上野駅に福沢諭吉（慶應義塾社頭）・小幡篤次郎（交詢社幹事）・濱野定四郎（慶應義塾校長）・岡本貞然（交詢社）・渡辺治（時事新報記者）の5人がいました。福沢一行は、上野～小山を汽車で、小山～笠間間を人力車、笠間～水戸間を馬車（福沢が乗車）や人力車（福沢以外の4人）で移動しました。4日には、徳川光圀ゆかりの常陸太田の町を、飯村丈三郎・立川興・名越時孝の3人が同行して、探訪しました。5日には、水戸市内を歴遊した後、偕楽園内の好文亭で開催の有志者招待親睦会に招待されました。この会の総代は、飯村丈三郎など5名でした。福沢はこの席上で、文明開化・殖産興業・鉄道敷設の効用などを語りました。6日には石岡を通過して土浦に赴き、同地で歓迎会に参加。福沢はここでも鉄道の話をしたことでしょう。福沢一行は、同夜、色川三郎兵衛宅に宿泊。7日には、松戸を経て、東京に帰りました。

鉄道敷設という夢への階段

福沢一行の水戸来遊以後、同年夏から秋の頃、水戸市内の豪商などが鉄道敷設への夢を少しずつ育てていきました。彼らは、同年12月に入ると、安田定則茨城県知事へ鉄道敷設の要望を伝えました。同月20日頃には、安田県知事、川崎八右衛門（東京・川崎銀行頭取）、水戸市内の豪商たちで鉄道敷設案・株金・会社のことなどに関する話し合いがもたれました。

茨城県鉄道史研究では、従来、安田県知事の主唱、川崎八右衛門の提案などが水戸鉄道敷設の契機と言われてきました。安田県知事は、同年5月8日に茨城県令、同年7月19日に茨城県知事に任命されました。安田県知事はハイカラな知事で、水戸鉄道敷設の計画も知事の発案と言われてきました。

明治19年当時の新聞記事などを読むと、安田県令の任命以前に、水戸においては福沢諭吉一行の水戸来遊によって鉄道敷設の効用が語られ、そのことから鉄道敷設への動きが加速化していったと思われます。鉄道の敷設には、知事や東京の財界人たちの支援や協力がなければ、大きなプロジェクトは達成できないのですが、地域住民

の発意・願望が大きな原動力であったことと思われます。

鉄道敷設への動き〈水戸鉄道 その１〉

明治１９年１２月、安田県知事・川崎八右衛門・水戸の豪商たちの鉄道敷設の会議で、会社の設立・株金の募集などの具体的な話し合いが進められました。株主は東京の財界人、水戸や常陸太田の豪商などですが、希望者が多数集まり、予定の金額に達してしまいました。

その後、知事は鉄道布設方法取調委員として、水戸方面では飯村丈三郎・埴載・大森平兵衛・富田彦市の４名、土浦・石岡方面では色川三郎兵衛・笹目八郎兵衛・村田宗右衛門・金子源兵衛の４名を任命しました。

２０年１月、先月に県庁で会合をした水戸方面の人々（飯村丈三郎・埴載）が、鉄道敷設請願の手続きを進めるため上京します。安田県知事も鉄道敷設の動きに歩調を合わせて上京します。水戸鉄道会社の創立発起人（４名）は、１月１９日に「水戸鉄道敷設請願書」を知事宛てに提出し、翌２０日に知事から国に上進されました。

鉄道敷設への動き〈水戸鉄道 その２〉

国に上進された請願書は路線の敷設場所が不明確なため、実地測量に基づき敷設の可否を判断して再提出という命令が出されました。同年３月、水戸鉄道会社は鉄道局に依頼し、測量を実施しました。北線（水戸ー内原ー穴戸ー笠間ー岩瀬ー下館ー結城ー小山）、南線（水戸ー見川ー鯉淵ー岩間ー羽鳥ー石岡ー新治ー下稻吉ー藤沢ー小田ー君島ー下妻ー結城ー小山）の南・北２線案で測量が行われました。その結果、北線案の距離が南線案よりも約１８ｋｍ短かったのです。短距離の場合、工事費用が安く、工事時間も短期間でできるメリットがあります。また、南線沿線では、霞ヶ浦・利根川・鬼怒川などの水運業者との競合が懸念され、鉄道敷設後の運行では支障となると考えられました。そこで、水戸鉄道会社は北線案での敷設を決定し、再請願をしました。

鉄道敷設への動き〈常総鉄道 その１〉

水戸鉄道会社が明治２０年１月に鉄道敷設請願のための動きを開始した時のことです。土浦・石岡方面の鉄道布設方法取調委員４名は、明治２０年の新年を迎え何らかの連絡があるものと思っていたのですが、何ら連絡がなかったため、事態確認のために県庁へ出向きました。彼らは、水戸鉄道会社が既に動きを始めていることを知り、

急遽、土浦・石岡方面での鉄道敷設の動きを始めることになりました。

同年２月、県南・県西方面の１４郡の有志者が会合し、常総鉄道会社の創立と鉄道の敷設の計画を進め、安田県知事宛てに請願書を提出しました。

鉄道敷設への動き〈常総鉄道 その２〉

明治２０年４月７日、常総鉄道会社発起人：土浦町の色川三郎兵衛など１４名が、常総鉄道会社創立請願書・同社定款を安田茨城県知事に提出しました。

県内を２分する鉄道「南線・北線」問題

明治２０年４月、水戸鉄道会社と常総鉄道会社の２社が、県内で同時期に鉄道敷設請願をするという事態になりました。水戸鉄道会社の計画は水戸ー小山間の敷設ですから、常総鉄道会社は県南・県西地域の利益、県下百年の大計ということで、安田県知事や磯貝静蔵県大書記官へ鉄道敷設請願の趣旨や熱意を訴え、歎願しました。

安田県知事は、５月に国からの鉄道敷設に対する諮問に対して、水戸鉄道路線での敷設の優位を伝えました。

５月１６日には、茨城県会議員２１名が鉄道問題に関する事態解決のため、常総鉄道会社創立委員：村田宗右衛門・金子源兵衛・色川三郎兵衛・笹目八郎兵衛宛てに、両社の鉄道敷設請願とその主張点を考慮した調停・中和策を提案しました。①両社は合併する、②測量に基づき路線を再考する、③これ迄の株金の取扱を清算し、水戸鉄道会社は常総鉄道会社に３割を支払うことを提案しました。

５月１９日、常総鉄道会社創立委員４名は、この調停策に対して異議無しという承諾の回答をしました。

鉄道敷設への動き〈常総鉄道 その３〉

５月１８日、県南・県西方面１４郡の総代たちは、伊藤博文内閣総理大臣に「茨城鉄道線路之義ニ付上言」を提出し、常総鉄道敷設許可のための陳情を行いました。

この上言は、「今や両線（水戸鉄道・常総鉄道の２路線のこと）一朝ノ方向ハ本県百年ノ利害ニ関スルヲ以テ有志会ニ於テ決定セル所ノ要領ヲ具陳シ此段奉上演候也」の言葉で結ばれていました。

鉄道敷設の認許・不認許

５月２４日、国は水戸鉄道会社の鉄道敷設請願を認許

し、常総鉄道会社には不認許の決定をしました。ここに、半年余りにわたる茨城県内外を大きく揺るがした鉄道問題は、新局面を迎えました。

水戸鉄道会社の対応

水戸鉄道会社では6月14日、社長：奈良原繁、取締役：川崎八右衛門（副社長）・天野仙輔・飯村丈三郎・塙載・山中隣之助・長谷川清、支配人：菊地永の会社役員を発表し、正式に会社が発足しました。そして、鉄道敷設の工事を行い、同21年11月3日の試運転を経て、同22年1月16日に開業しました。当日は、東京から多数の来賓を迎えて、盛大な開業式が挙行されました。

常総鉄道会社の対応

常総鉄道会社創立委員総代4名（色川・村田・金子・笹目）は、6月に鉄道敷設に関わる経緯を、「常総鉄道会社創立手続及其沿革」として刊行し、関係者に配付しました。発行数や配付先などは不詳です。この冊子は、石岡・土浦など県南・県西地区で鉄道敷設に関わった人々の行動・願いなどを知ることのできる貴重な史料です。

笹目家「鉄道敷設関係」文書の意義

石岡市高浜の笹目（篠目）家には多くの古文書が残されています。その中に、「鉄道敷設関係」の文書（9点）があります。詳細は表2の笹目家史料目録を参照してください。これらの文書には、従来の茨城県鉄道史研究ではあまり注目されてこなかった文書も含まれています。

NO1は、常総鉄道会社の創立以前の明治20年2月、土浦町の色川三郎兵衛などが安田県知事宛てに請願した文書です。県南・県西方面の14郡の有志者が鉄道敷設の熱意を嘆願していたことを物語っています。南線・北線問題の論争点や相違点などが覗えます。

5月18日、伊藤博文内閣総理大臣への請願・陳情の件は前記しましたが、NO2「茨城鉄道線路之義ニ付上言」はその草稿です（日付未記載）。文末に氏名の記載はありませんが、各所に推敲や熟考の跡が読み取れます。

NO3とNO9の史料からは、伊藤博文内閣総理大臣への陳情時の状況や心情が覗えます。

NO5「常総鉄道会社沿革ノ概略」は、6月刊行の「常総鉄道会社創立手続及其沿革」の草稿と思われます。

NO6には表題が付されていませんが、5月16日に茨城県会議員から提案された調停策の写しです。常総鉄

道会社創立委員からの回答の記載はありません。

NO7「水戸鉄道会社説明書」は、鉄道敷設で競願していた水戸鉄道会社関係の史料ですが、笹目家に何故残されているのかは不明です。内容は、鉄道敷設に関する鉄道建設諸費用などの貴重な情報が記載されています。

石岡市方面の鉄道史研究のために

常総鉄道関係の歴史研究では、『茨城県史料＝近代産業編Ⅱ』が基本史料でしたが、笹目家文書及び『伊藤博文文書 第111巻 秘書類纂 交通一』によって、常総鉄道及び同社に関係する新しい史実が分かりました。今後、石岡市内・外において、鉄道史料の発見に努め、鉄道史研究が進展することを期待します。

参考文献

- 『日本国有鉄道百年史 第2巻』（日本国有鉄道、昭和45年）
- 『茨城県史料＝近代産業編Ⅱ』（茨城県、昭和48年）
- 『伊藤博文文書 第111巻 秘書類纂 交通一』（ゆまに書房、平成26年）
- 中川浩一『茨城県鉄道発達史 上』（筑波書林、1980年）
- 秋山高志「水戸鉄道（初代）の歴史」（『鉄道ピクトリアル』〔鉄道図書刊行会〕353号、1978年10月号）
- 森田美比「水戸鉄道の開業」（『日本歴史』〔吉川弘文館〕572号、平成8年1月号）
- 『石岡市立ふるさと歴史館第9回企画展 鉄道の時代に描いた夢ー明治～昭和初期の鉄道計画と石岡の先人たちー』（石岡市教育委員会、平成28年）
- 川俣正英「アーカイブズに見る茨城県初の鉄道会社誕生経緯ー水戸鉄道会社・常総鉄道会社ー」（『茨城史林』〔茨城地方史研究会〕43号、2019年6月）

表1 水戸線開業130周年の主な歩み ―水戸鉄道の開業時期～令和―

和暦(西暦)	月/日	主 な 事 項 ・ 内 容
明治18年 1887	7/16	日本鉄道第二区線(現JR東日本:東北本線・宇都宮線)の大宮駅(埼玉県)―宇都宮駅(栃木県)が開通した。同線内では、古河駅が開業し、茨城県初の鉄道の駅となった。
19年	5/3	福沢諭吉など5名が水戸来遊。水戸や常陸太田市内の見学、歓迎会などを行った。歓迎会では、鉄道の効用・殖産興業の必要性などを語ったと思われる。5/3～6水戸。5/6～7土浦。5/7帰京。
	5/8	元老院議員安田定則を茨城県の県令に任命。7/20、安田定則を茨城県知事に任命。
	12/	水戸の豪商たちが、茨城県に鉄道敷設の要望を出す。
	12/	安田知事・川崎八右衛門(川崎銀行頭取)・水戸の有志者などが、県庁で鉄道敷設・会社創設などを協議。
	12/23	知事が鉄道布設方法取調委員:飯村丈三郎・埴井・大森平兵衛・富田彦市・色川八郎兵衛・笹目八郎兵衛・村田宗右衛門・金子源兵衛を任命。
		水 戸 鉄 道 会 社
20年	1/8	飯村丈三郎・埴井が上京。1/10安田知事も上京。
	1/19	水戸鉄道会社(発起人:飯村丈三郎・埴井・長谷川清・川崎八右衛門)が鉄道会社創立請願書を茨城県知事宛に提出。路線案は請願書には明記なし。
	1/20	安田茨城県知事から内閣へ同社の請願書進達。
	1/22	1/17、水戸鉄道会社は日本鉄道会社に、水戸鉄道会社を日本鉄道会社の支線と見なし、測量・工事・運輸に関しての委託を申請。承諾された。
	3/	井上鉄道局長官は敷設路線の測量に基づいた再申請を指示。鉄道局による敷設路線の測量を実施。 北線:水戸―笠間―下館―結城―小山 南線:水戸―石岡―北条―下妻―結城―小山 鉄道局は北線は南線より11マイル短く、工事費も30万円ほど安く、霞ヶ浦・利根川水運との競合もないことから、北線採用を勧告。
	4/15	発起人たちは、井上鉄道局長官の意見に基づいて北線案に決定し、線路図・工事予算書を添え、着手後2年以内に落成という迫願書を提出。
		常 総 鉄 道 会 社
	1/9	鉄道敷設について、県からの連絡がないため、県庁に出向く。水戸鉄道会社が先行して動いたことを知る。独自の動きを模索。
	1/29	下妻で「鉄道評議会」を開催。県南・県西方面の関係者が参加。鉄道の利害について協議。
	3/20	石岡で演説会。4/5、土浦で演説会。 <div>茨城県内での鉄道敷設に関して、県内をあげての論争が展開された。茨城鉄道問題として、「南線・北線」問題が新聞紙上で展開された。1～5月。新聞各紙により、支持・反対の意見がある。</div>
	4/7	常総鉄道会社(発起人:色川八郎兵衛ほか13名)が鉄道会社の創立を請願。水戸―石岡―土浦―下妻―諸川―古河
	4/25	安田知事は、水戸鉄道会社の出願があり、常総鉄道会社の請願には難があるとして、出願の取下げを示唆したが応諾無し。やむなく政府に同社出願を上申。
	5/6	伊藤博文内閣総理大臣が、4/29井上勝鉄道局長官に水戸―小山間の鉄道敷設について諮問。井上は、5/6水戸鉄道の南線・北線の決定基準、小山駅に接続し海産物の群馬・栃木方面への販路拡大などの利点・得失などから水戸鉄道の敷設を許可を答申。常総鉄道の水戸―古河間の鉄道敷設については、東京への距離は水戸鉄道よりも近くなるが、前記の理由により敷設不許可と答申。
	5/16	茨城県内に2つの鉄道敷設問題が起こり、茨城県議員が鉄道問題解決のため、調停策の提案。①両社の合併、②社名の変更、③敷設路線の再検討、④株金の取扱など。水戸鉄道会社は不承諾。常総鉄道会社は承諾。
	5/18	5/6石岡、5/8下妻で集会。県南・県西方面の鉄道敷設の動きが高揚。県議員に仲裁もあったが、県南・県政13郡の代表者が伊藤博文内閣総理大臣へ鉄道敷設の陳情。
	5/20	安田定則知事は、5/15、5/20に水戸鉄道会社の出願許可を政府に答申。
	5/24	国は水戸鉄道会社の鉄道敷設を認許。
	5/24	国は常総鉄道会社の鉄道敷設を不認許。
	6/	「常総鉄道会社創立手続及其沿革」の刊行。鉄道敷設活動全般の事後処理がいつ収束したかは不詳。
	6/14	井上鉄道局長官から「水戸鉄道会社命令書」を交付。同社の定款を認可。水戸鉄道会社が正式発足。社長:奈良原繁(日本鉄道会社社長兼任)、取締役:川崎八右衛門・長谷川清・天野仙輔・飯村丈三郎。本社は東京府日本橋区増物町。資本金は100万円。
	7/30	水戸鉄道の建設工事は日本鉄道会社の支線と見なし、官設鉄道での建設を請願。承認された。
	8/10	鉄道局事務官足立太郎が水戸鉄道工事の担当となった。
	8/29	小山に出張所を置き、線路測量から工事がスタートした。
	11/	小山―水戸間の建設工事着工。
21年	11/3	試運転を実施。
22年	1/16	水戸鉄道の開業。水戸―内原―太田町(現実戸)―笠間―岩瀬―下館―結城―小山。 41マイル45チェーン(66.9km)、約2時間40分。 開業式(水戸駅)には来賓約300名。沿線各地からも多数の参列。盛大な式典を挙行。 開業以来、鉄道会社の営業を日本鉄道会社に委託。 水戸線各駅の開業(現行) 水戸―偕楽園(臨時駅:T14.2.2)―赤塚(M27.1.4)―内原―友部(M28.7.1)―実戸(太田町,M22.5.25実戸に改称)―笠間―稲田(M31.5.8)―福原(M23.8.1)―羽黒(M37.4.1)―岩瀬―大和(s63.6.20)―新治(M28.9.15)―下館―玉戸(s63.6.20)―川島(伊佐山:M22.4.16,M22.5.25川島に改称)―東結城(S12.12.1)―結城―小田林(S30.4.1)―小山(日本鉄道会社,M18.7.16)
23年	10/29	明治天皇近衛師団の軍事演習統監のため水戸訪問。水戸鉄道会社関係者に褒詞と下賜金(1000円)。
	11/26	水戸―那珂川駅間が開通。那珂川駅は、那珂川水運の貨物の流通のための貨物駅。
24年		明治23年度末の車両数:機関車3両、客車12両、貨車51両。
25年	3/1	水戸鉄道会社が日本鉄道会社へ合併。日本鉄道会社の支線として運営。
28年	11/4	日本鉄道土浦線(友部―土浦間)が開通。
29年	12/25	日本鉄道土浦線(土浦―田端[東京都]間)、隅田川線(田端―隅田川駅)が開通。水戸と東京が直結。
30年	4/	「鉄道之碑」(初代)が水戸駅前広場に建立。碑石の刻字には、「明治30年4月」とある。
	12/25	日本鉄道磐城線(水戸―平間)が開通。
34年		土浦線・隅田川線・水戸線(友部―水戸)・磐城線を総括して海岸線となった。
39年	11/1	日本鉄道会社が国有化。
42年	10/12	国有鉄道の線路名称の決定。水戸線(小山―友部)。常磐線(田端―岩沼)。水戸鉄道当初の水戸―友部間は常磐線となった。令和の現在も水戸線の名称を使用。水戸線の列車は、常磐線水戸駅への乗り入れ列車も運行。
昭和11年 1936	10/29	「鉄道之碑」(初代)が水戸駅前に移設。建碑復興式を挙行。(大正4年水戸駅の火災による駅の改築に伴い、駅前北東隅に移設。昭和4年の特別大演習実施のため水戸駅前整備で撤去。撤去の場所は不明。昭和11年に再移設。昭和20年戦災。水戸駅前の戦後復興時に撤去・処分。その後の経緯は不詳。)
		日本国有鉄道が発足。
24年	6/1	「鉄道之碑」(2代目)が建立された。日付は碑石の刻字による。設置場所は水戸駅北口。
39年	2/18	水戸線が電化された。
42年	3/20	水戸線開業95周年。記念列車が水戸―下館間(往復)で走った。
59年	1/15	水戸駅が橋上化された。この駅舎は、水戸鉄道開業時からでは6代目の駅舎。
	7/1	日本国有鉄道が民営化され、東日本旅客鉄道株式会社(JR東日本)となった。
62年	4/1	水戸線開業100周年。水戸―小山間の各駅では、祝賀行事やイベントが行われ、記念列車が走った。
64年	1/16	水戸線開業110周年。水戸市立博物館で特別展「水戸駅―開業から百年―」(10月14日～11月21日)。
平成11年		水戸線開業120周年。スタンプラリーを友部・笠間・岩瀬・下館・結城・小山の6駅で実施。
21年		石岡市立ふるさと歴史館で、「鉄道の時代に描いた夢」の展示(8月30日～11月27日)。
28年		水戸線開業130周年。水戸・友部・笠間・下館・結城・小山の6駅でスタンプラリーなどの記念事業を実施。1/19に記念列車が下館―水戸間を走った。
31年		飯村丈三郎シンポジウム開催。「水戸線の成り立ちと飯村丈三郎」(笠間市)
令和 元年	6/22	石岡市文化財調査報告会開催。「水戸線の開業―常総鉄道との競合をめぐる―」(石岡市)
	8/3	

注:太線枠…水戸鉄道会社の誕生経緯、日本鉄道会社、日本国有鉄道、JR東日本の関連事項などに区分し、表記した。

出典:『日本国有鉄道百年史』第2巻(昭和45年)、『茨城県史料―近代産業編Ⅱ』(茨城県,昭和48年)

中川浩一『茨城県鉄道発達史 上』・『茨城県鉄道発達史 下』(筑波書林,1980年)、明治期の各種新聞記事など

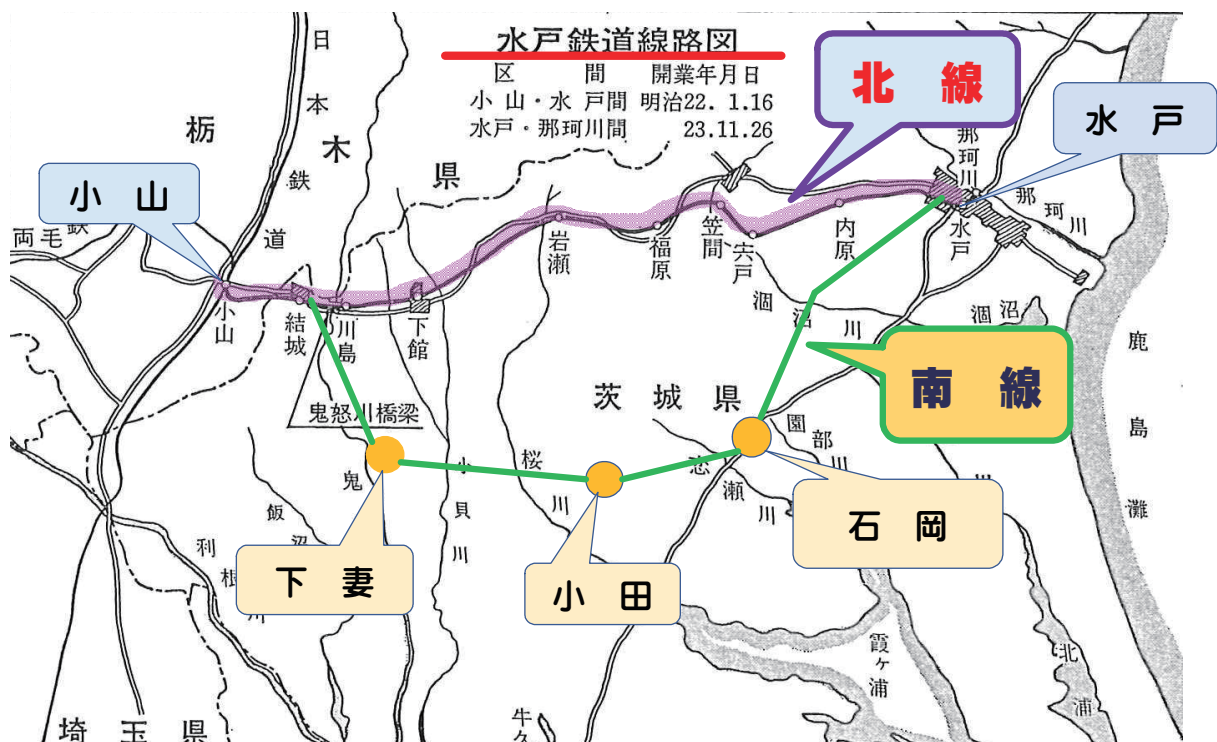


図1 水戸鉄道線路図（南線・北線）

明治20年3月の実測図をもとに作成しました。



図2 水戸鉄道（北線）・常総鉄道（南線）路線案（明治20年4月）

常総鉄道路線案は実測図面がないため敷設計画地の地名で路線を想定しました。



図3 水戸鉄道開業時記念写真（明治22年）
同社創立発起人の飯村丈三郎（前列右から3人目）
（『茨城100年グラフ』〔茨城県〕，昭和43年）

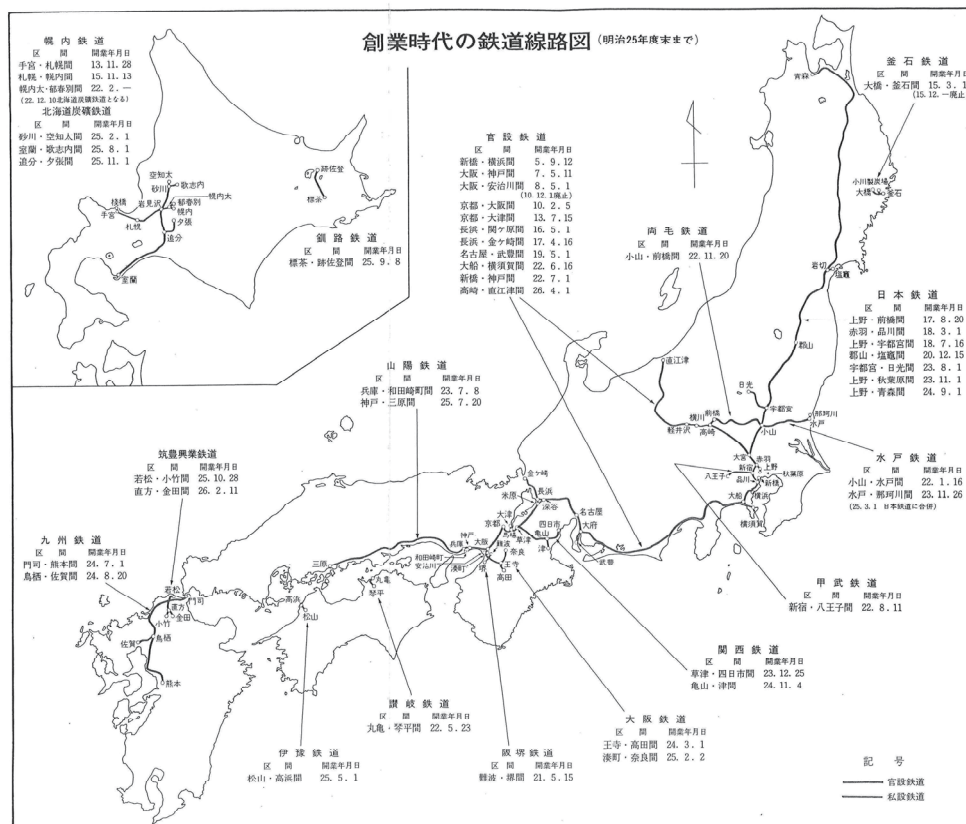
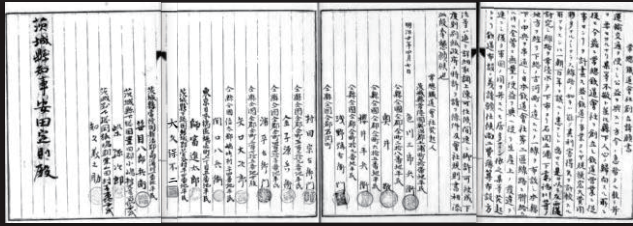


図4 創業時代の鉄道路線図（明治25年度末まで）
（『日本国有鉄道百年史 第2巻』）

常総鉄道の発起人たち ～石岡の発展をけん引した人々 其の1～



▲明治20年4月に県知事に提出された常総鉄道会社創立請願書（国立公文書館所蔵）

石岡町から常総鉄道の発起人として名を連ねているのは、村田宗右衛門、金子源兵衛、濱平右衛門、矢口大次郎の4人、高浜からは笹目八郎兵衛の名がみえます。



村田 宗右衛門 1843-1901（石岡町） 街道随一の豪商

村田家は、江戸後期に陸前浜街道（江戸－仙台）随一と謳われた豪商で、明治治期には酒・醤油醸造や郵便事業を行った。酒造米の精米に蒸気機関を用いるなど進取の気風をもち、晩年には専売局建設のため屋敷2,000坪を国に寄付。この敷地は現在国府公園として市民の憩いの場になっている。



金子 源兵衛 1854-1904（石岡町） 県内一の醤油醸造家

醤油醸造を行っていた金子家は、屋号を「金源」と言った。この時代は、高浜から舟で東京に出荷するなど販路を広げ、生産額は県内随一でした。明治22年には石岡銀行を創立して頭取を務めたほか、明治33年から同37年まで県議会議員として県政の発展に努めた。



濱 平右衛門（石岡町） 若くして次代にバトンを渡した醸造家

濱家は代々「平右衛門」を襲名する醤油の醸造家で、商号は「山吉」。明治20年当時の平右衛門は、その後若くして世を去り、16歳で家業を継いだ次代の平右衛門は、後に鹿島参宮鉄道株式会社を設立して社長に就くなど石岡の発展に大きく寄与することになる。



矢口 大次郎 1853-1934（石岡町） 8期務めた初代石岡町長

矢口大次郎は、江戸時代に府中宿の本陣を務めた家に生まれ、東京で修学した後、石岡小学校の前身である第二八番中学区第四校で教員を務めた。明治20年に官選の石岡戸長（知事が任命する行政事務の責任者）、明治22年の町村制実施で初代石岡町長となり、以降8期32年にわたって町の発展に尽力した。



笹目(篠目) 八郎兵衛 1844-1895（高浜村） 交通界の大立者

笹目(篠目)家は高浜で代々名主を務める一方、古くから回漕問屋を営んだ。霞ヶ浦の高波や街道の悪路で荷が滞るのを避けるため、汽船輸送や車馬による陸運を開設。高浜に常磐線を通す際も大きな力を発揮したといわれる。明治14年と同21年には県議会議員に選出され、県勢発展にも尽力した。

図6 常総鉄道の発起人たち～石岡の発展をけん引した人々 其の1～

（「石岡市立ふるさと歴史館第9回企画展
鉄道の時代に描いた夢—明治～昭和初期の鉄道計画と石岡の先人たち—」）

表2 笹目家史料目録

NO	史料名	作成者	宛先	年月日
1	茨城鉄道線路之義ニ付請願書	土浦町色川三郎兵衛他43人	茨城県知事安田定則	明治20年2月
2	茨城鉄道線路之義ニ付上言（茨城県下拾三郡有志者上言之原稿）	（なし）	（なし）	（なし）
3	南部請願義ニ付（控）	県会議員色川三郎兵衛・鉄道敷設人総代金子源兵衛他二人	伊藤総理大臣執事	明治20年5月7日
4	茨城県鉄道之義ニ付建議書（下書）	（真壁郡有志惣代同郡大里村多賀谷彦四郎・同郡半谷村塚越彌一郎・新治郡有志惣代同郡石岡町大久保誠之助〔後欠〕）	（不詳）	明治20年5月9日
5	常総鉄道会社沿革ノ概略（下書）	村田宗右衛門他二人	（なし）	（なし）
6	（鉄道敷設ニ関し水戸鉄道会社常総鉄道へ尽力願）	谷田部町今川俊一郎他10人	常総鉄道会社創立委員 笹目八郎兵衛他3人	（なし）
7	水戸鉄道会社説明書	（なし）	（なし）	（なし）
8	（鉄道敷設ニ付・下書）	（なし）	（なし）	（なし）
9	（南線敷設ニ付嘆願・下書）	（なし）	（内閣総理大臣）	（なし）

石岡市高浜の笹目家史料目録は、番号・史料名・作成者・宛先・作成年月日の項目で整理されています。
史料名などで、明かな誤記がある場合は訂正をしました。

表3 常総鉄道（南線）の敷設運動に関わった人々

笹目家史料 NO 1 の請願者（明治20年2月）			伊藤博文への請願者（明治20年5月）		
新治郡	土浦町	色川三郎兵衛・奥井敬	新治郡	土浦町	大塚新蔵
	石岡町	村田宗右衛門・金子源兵衛		石岡町	小林重吉
	高浜村	笹目八郎兵衛			
	下玉里村	鈴木源之允			
西茨城郡	押辺村	飯田喆三			（西茨城郡なし）
	平町村	立川利平			
	大田町村	鈴木重嗣			
	岩間下郷	塩畑政雄・町田作造			
	湯崎村	上野長三郎・前沢隆介			
	長兎路村	上野清八			
東茨城郡	下飯沼村	東ヶ崎兵五	東茨城郡	小川村	中山儀八・井崎忠介・小仁所新介
	下土師村	皆藤登			
	蕎麦原村	小野瀬政之介			
	西郷地村	井坂伝弥			
筑波郡	北条村	市村庄次郎	筑波郡	筑波町	広瀬暢三
	筑波村	八木下信之		北条村	市村藤治郎
行方郡	玉造村	大場惣助	行方郡	玉造村	大場惣助
	麻生村	三好琢磨			
	牛堀村	坂嘉也・須田幹之介			
鹿島郡	宮中村	小堀亀太郎・北條時成	鹿島郡	宮中村	高安佐七・北條時紹
		萩原謙次・高安清右衛門			
信太郡	興津村	坂本長左衛門	信太郡	大形村	吉田倉之助
	鳩崎村	関口八兵衛			
河内郡	龍ヶ崎村	岡島健之助・杉野次郎兵衛	河内郡	牛久村	入江千代太郎
		岡田省三・岡野昌治			
北相馬郡	取手駅	染野晋			（北相馬郡なし）
	下高井村	広瀬誠市郎			
岡田郡	国生村	長塚源次郎	岡田郡	国生村	長塚源次郎
豊田郡	小島村	柴孫次郎	豊田郡	川尻村	赤松新右衛門
	若宮戸村	小林康太郎		田下村	山中茂一郎
	本宗道村	森隆介		伊古立村	飯泉善一郎
結城郡	結城町	若井治平	結城郡	菅谷村	大久保七郎兵衛
真壁郡	下妻村	内田林八・猪瀬兼吉・軽部斐	真壁郡	下妻村	内田林八・鈴木昭
			猿島郡	大和田村	斉藤萬助
			西葛飾郡	磯部村	堀江藤彌
【合計】13郡44名			【合計】13郡21名		



図7 茨城鉄道線路ノ義ニ付上言（前半部）
伊藤内閣総理大臣への陳情（明治20年5月18日）
『伊藤博文文書 第111巻 秘書類纂 交通一』

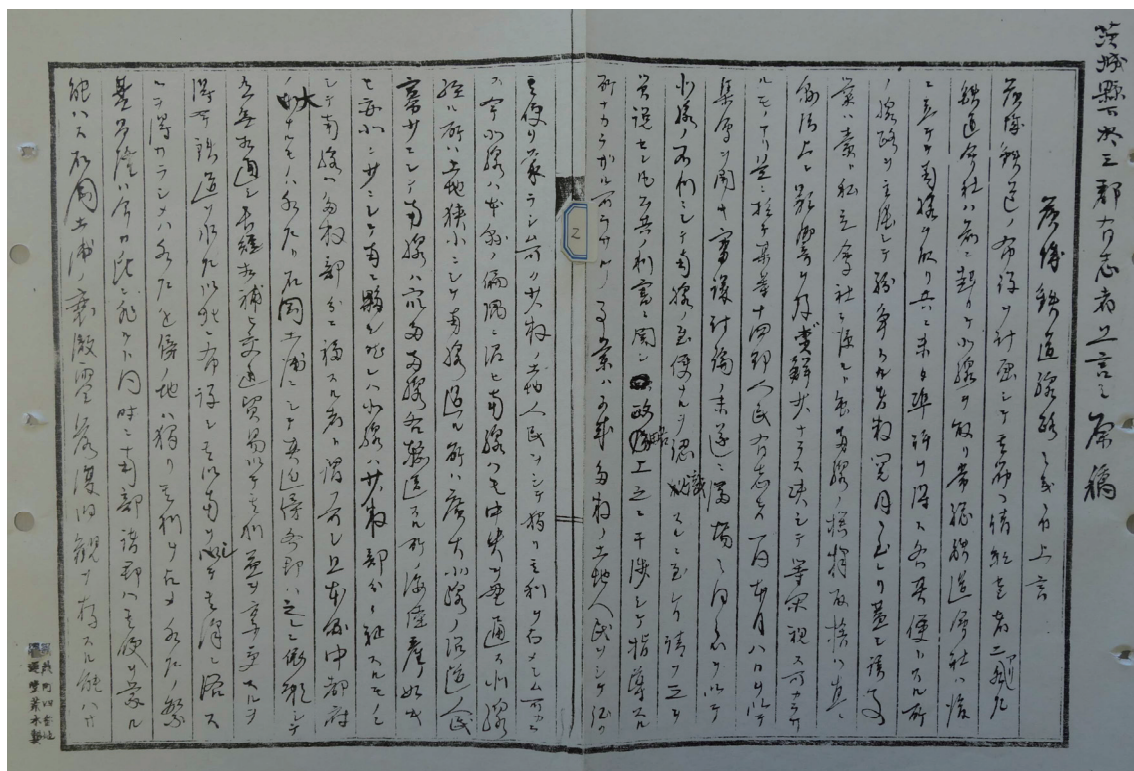


図8 茨城鉄道線路之義ニ付上言（前半部）

笹目家史料 NO 2 で、作成年月日の記載はありません。原稿用紙の枠外に「茨城県下拾三郡有志者上言之原稿」とあり、5月18日に伊藤博文内閣総理大臣に陳情した上言の原稿と思われます。笹目家に史料が残されていることから、笹目八郎兵衛の起草と思われます。